

第3回小田原市市民活動推進委員会 会議録

- 1 日 時：平成 25 年 8 月 30 日（金） 午後 3 時 10 分～午後 5 時 40 分
- 2 場 所：小田原市役所 602 会議室
- 3 出席者：前田委員長、神馬副委員長、島村委員、田代委員、久積委員、毛利委員、片野委員、
栢沼委員、柳川委員、山崎委員
事務局：石井課長、小川副課長、桂主査、小澤主任、木村主事
- 4 資 料： ・次第
 - ・資料 1 中間支援組織についての議論整理
 - ・資料 2 委員提言「求められる中間支援について」
 - ・資料 3 求められる中間支援
 - ・資料 4－1 中間支援組織の事例 CS 神戸
 - ・資料 4－2 中間支援組織の事例 大阪ボランティア協会
 - ・資料 5 市民提案型協働事業 第二次審査実施要領

■ 開会

委員長：ただいまから、第3回小田原市市民活動推進委員会を開会する。

本委員会の会議は、原則公開となっているのでご承知おきいただきたい。傍聴の方においては、傍聴者の遵守事項をお守りいただきたい。

議事に入る前に、事務局から配布資料の確認をお願いする。

（事務局 配布資料の確認及び本日の流れの説明）

■ 議題 1 諮問事項について

<ア. 前回の論点整理>

委員長：それでは議事に入る。議題 1 諮問事項についてのア. 前回の論点整理について、事務局より資料に基づいて説明をお願いしたい。

（事務局 資料 1 に基づいて説明）

委員長：ただいまの説明で何か意見や質問はあるか。

（発言なし）

委員長：それではこの論点整理については、今後、本委員会で議論をする際の重要な柱となるので、記憶に留めておいていただきたい。

<イ. 委員提言（神馬委員）>

委員長：本日は市民活動の経験が大変豊富な神馬副委員長から、求められる中間支援組織についてお話をいただく。まずは説明をいただき、その後、質疑等があればお願いする。

委員：三つの施設（市民活動サポートセンター、国際交流ラウンジ、女性プラザ）は、私も団体として利用している。「あおいほし」という団体は、主に環境や健康など暮らしの啓発活動を行っている。国際交流や支援については、「KHM」という団体で、事業部門は「ちえのわハウス」、国際支援では「WE 2 1 ジャパンおだわら」

という団体にも関わっている。そして、文化芸術の分野として、「小田原文化サポーター」が2009年に立ち上がり、現在は市民会館やけやきでのコンサート受付のお手伝いなどを行うボランティアとして登録している。このうち、「小田原文化サポーター」には独自の拠点が無いので、定例会などの会議はサポートセンターを使っている。サポートセンターなどの三施設がなかった頃は、地区公民館、中央公民館（現けやき）、私立の施設を利用して会議や講座を行ってきた。

サポートセンターの登録団体のジャンルは様々であるが、私も今挙げた団体で各々に登録をしているので、それぞれの施設が主催する交流会や学習会の沢山のお知らせが来る。

国際交流ラウンジの土日祝日の開館時間が短くなったそうだが、国際交流の団体以外の団体にも門戸を広げるようにしたとのことで、これからまた利用が増えると思う。

サポートセンターでは「サポセン祭り」が毎年マロニエという市の施設で開催されるが、私としてはサポートセンターが入っている市民会館で行うのが良いと思っている。市民会館は駐車場が少ないのと、駅から少し距離があるので不便な部分もあるかもしれない。専ら印刷や会議の目的で利用するが、私は特に用がなくても立ち寄り、チラシ等で活用出来るものがないかという利用の仕方もしている。

国際交流ラウンジが、あの場所にあることを知っている方は本当に少ない。階段しかないこともあり、少し行きにくい場所であると思う。国際交流ラウンジを利用するのは、国際交流団体連絡会に登録のある団体や、小田原近隣で国際交流・支援に関わっている方々であり、そういった団体に関わるのが「地球市民フェスタ」である。これもまたマロニエを会場としている。お祭りなので良いのだが、お祭りだけになっている感があり、市内に住む外国人や一般市民が国際交流の意識を高められるような働きかけが、このフェスタにおいてできているのかは疑問である。「ティーサロン」が毎月開かれているということだが、来場者は限定されていると思う。現在、様々な所で「何とかカフェ」といった催し物が多く開催されている。お茶を飲みながら、気楽に楽しめるという意味合いで「カフェ」と言うのだろう。国際交流ラウンジは、そういった「カフェ」を実施しやすい雰囲気であると思う。「地球市民」というのはとてもいいネーミングだと思うので、こういった主旨が活かされる施設になると良い。

女性プラザは、音楽が流れていてとても柔らかい雰囲気があるが、トイレの問題や入りにくいというのがネックではないかと思う。そもそも女性団体という枠組みについて、男性はだめなのかということもある。決してそうではないのだが、登録している女性団体自身も女性団体としてくくられることで、逆にしほりがあるのではないかという戸惑いもある。ただ、女性や弱者が生きやすい社会は、誰もが生きやすい社会であると言える。暴力にあっている人や弱い立場にある人はやはり女性が多いと思うので、そういった不公平をなくす政策の発信拠点になると良い。

これらの支援施設を利用するメリットとしては、会議室という集える空間があり、拠点のない団体にとっては貴重な場であることや、使用料が無料であること。サポ

ートセンターの印刷機能は安いので多く印刷する際は便利である。フリースペースがあることや、当日でも対応してもらえるなど柔軟性もある。無料だからかもしれないが、施設でよくある「午前」の枠、「午後」の枠というのがなく、1時間単位で利用でき、短い会合などでは、そういった使い方が出来るのは便利である。また、登録している団体同士のつながりや、イベントで交流が出来る、活動が広がる、視野が広がる、知り合いが増えるというのがある。特にサポートセンターでは、毎年、夏に中高生ボランティアを募集し、それをとりまとめてくださっている。私たち団体が個々に学校やPTAに声をかけなくても、サポートセンターにボランティアの受け入れが可能と言え、情報をまとめて広報していただけるので、これは素敵な事業だと思っている。先日の自治会と登録団体の意見交換会は、仕事があつて行けなかったのも、もし今後もあればぜひ参加したい。こういったイベントや横のつながり、学びなどにより、活動に幅が広がっていると思う。

これから望むことだが、公の施設は月曜日がお休みのところが多いので、月曜日の活動に制約がある。それから、何かを調べるのに情報がまとまっているのは助かるので、検索や問い合わせの機能を充実させてほしい。また、困りごとや相談に対するコーディネートにも期待したい。

現在、街なかに三施設があり、新しい施設も駅前である。小田原は東から西まですごく広いので、理想を言えば、誰もが自転車で行ける範囲で会議が気軽に出来る場所が点在していると良い。ただ、気軽に行ける場所が多くなってしまうと、学生の溜まり場になってしまうこともある。

今後についてだが、(仮)市民活動交流センターに機能が一括集約されることで、運営の効率が良くなると思う。私に関わる団体のように、それぞれの施設で重複して登録している団体も整理され、情報がわかりやすくなる。しかし、かける3倍にはならないであろうし、そこで時間的な制約や活動への制限が出てくると残念である。建物の一階部分に設置される予定ということなので、入りづらいということはないかもしれないが、その反面、特に用がなく訪れる人に対するルールなどは難しいと思う。

また、施設を使う方たちが「私たちが活動している施設なのだ」という所有感を持って、運営に参加出来る仕組みが必要である。「サポセン祭り」は実行委員を募集して行っているが、大抵の団体は当日参加に留まり、自分たちのブースをやって終わりになってしまう。出来る範囲で自分たちの時間や労力を出し合いやっつければ良い。新しい施設の使用料は有料になってくると思うが、無理のない適正な負担の設定をしていただきたい。最後になるが、私は小田原に来て16、7年になる。横浜出身で今も横浜や東京で活動することが多い。そこから小田原に戻ってくると、小田原なりの空気や時間の流れ方を感じる。それが魅力でもあり、適度なローカルさは弱点でもあると思うが、今後の市民活動のさらなる発展に、小田原らしさも活かした何かがあれば嬉しい。

それから、それぞれの施設に登録していなくても、長く活動している方が多くいらっしゃるようなので、そういった方たちともっと知り合えたら良い。

委員長：それでは神馬委員のご提言について、意見や質問はあるか。

委員：サポートセンターのホームページをご覧になったことがあると思うが、そのコンテンツの中で「市民活動ってなに？」というのがある。市民活動とボランティアの違いや市民活動のマナーが載っており、参考になると思う。

委員長：サポートセンターによく立ち寄るとおっしゃっていたが、それにより、ほかの団体との交流は生まれるか。

委員：その場では会議や作業をしているので、そこで何かがあるということはないが、チラシや掲示物を見たり、その場での団体の利用状況がわかることで、それぞれの団体がどんな活動をしているのか知ることが出来る。

委員長：「サポセン祭り」に数回伺ったことがある。先ほどの話だと、自身の団体の販売や展示の説明で時間をとられ、交流はなかなか難しいとのことであった。例えば5人でブースを出す団体が、その中の3人でブースを回し、あとの2人はほかの展示を見てくる、というようには出来ないのか。

委員：少ない人数で参加している団体もある。参加する側も交代して、ほかのブースを回るのが理想的ではある。

委員長：仮称で、「市民活動交流センター」とされていることを考えた場合、「サポセン祭り」以外に、1月の「新春交流会」に数回伺ったことがあるが、「交流」ということを考えると「新春交流会」の方が交流出来るのか。

委員：団体間としてはそうである。「サポセン祭り」はどちらかと言うと、団体が市民にアピールする場である。ただ、「サポセン祭り」の「サポセン」とは何か聞かれることがある。サポートセンターの場所を知らない方が多い。サポートセンターの日頃の活動を説明するようなブースがなく、会場がマロニエということもあり、サポートセンターが市民会館にあるということに結び付かない。

委員：「サポセン」をお祭りのことだと思っている方もいた。

委員長：サポートセンターの知名度向上も重要である。

委員：「サポセン祭り」でのパネル展示は、ほかの団体が何をやっているかわかりやすく書かれている。私自身もパネル展示を見て、興味があった団体と関わることが出来た。

委員：パネルは市役所や市民会館で展示する期間もある。あのパネルは本当に見ごたえがあり、団体の活動がわかるものである。

委員：資料2裏面の「これから」に、新しいセンターの勢いが縮小してしまわないか、三つの施設が一つになっても3倍にならないのではないかという懸念があるが、そうならないようにしていくためにも、中間支援として何をしていくかがこの委員会の諮問事項であるのだと思う。そこで今いくつか出た、交流を促すということについては、イベントで出来ているものもあれば、出来ていないものもあるということであったが、そういった交流を促す仕組みが新しい施設にある、あるいは施設を運営する主体が持つ役割としてあれば、3倍どころか4倍にも機能が高まり、皆さんが利用する中で市民活動にとって有用な施設になっていく。今後、諮問事項の議論の中で、そのような視点により気付くことがあれば発言していきたい。

- 委員：利用する側もそうだが、様々な市民活動団体の活動を活発にするためには、コーディネートのみならず、運営主体は重要になると思う。
- 委員長：実質的な運営をどのように担っていくかは重要な点である。いつが休館日になるのか、また施設は有料になるのかは現状では白紙か。
- 事務局：まだ決定事項ではないが、事務局としては、サポートセンターのミーティングルームのようなクローズした占有スペースは、利用者の一定の負担があっても良いと考えている。ただ、オープンな交流出来るスペースは、団体同士が交流する場でもあるので、なるべくそういった場を広く作り、活動の場でもあり交流の場でもあるというようにしていきたい。休館日については仮置きで月曜日としているが、検討の余地がある。
- 委員長：この委員会では機能的な方向性はもちろんのこと、実際に使い勝手が良いか悪いかに関わってくる、例えば、「無休とすべき」などはどこまで意見を言えるのか。
- 事務局：中間支援機能として、それが結果的に市民活動の向上に結び付くならば、様々な視点での意見をいただきたい。
- 委員：ふらっと立ち寄れて、誰でも利用出来るスペースの話があったが、実際に小中学生や子ども同士での利用は可能なのか。
- 委員：きちんとした利用と区別するのは難しい。
- 委員：館内の利用がなければ、ロビーなどの利用も出来ない施設もある。けやきやマロニエでは、ロビーで子どもが何かをやっている、そのままやらせてあげている。三施設は誰でも立ち寄れるが、子ども同士でふらっと来た場合、利用についての年齢制限などはあるのか。
- 事務局：特に年齢制限は設けていない。
- 委員長：ボランティアに興味のある高校生が来て打ち合わせをするのは良いことである。ところがその反面、高校生がその場を期末試験の勉強の場として占拠してしまうと主旨と違ってくる。県内の市民活動の施設で、隣に予備校があったため、その施設でずっと勉強をされてしまい退出してもらったという例を聞いたことがある。入場制限が出来ないので難しい。
- しかし、若い方にはどんどん来ていただきたい。高校生がそこにあるチラシを見て、ボランティアに参加するのは良いことである。うまくそういった雰囲気を出せると良い。
- 本日この後の議題で、中間支援に関する考えを皆さんから一言ずつ発表していただくが、第1回で事務局より示された答申までのスケジュールによると、10月と11月の委員会においても神馬副委員長と同様に、求められる中間支援組織について委員提言をお願いする予定となっている。
- そこで、10月については、市民活動応援補助金も受けられ、市民活動の経験も豊富な毛利委員と、市民活動と企業の連携という視点から、片野委員にお願いしたいかがか。
- (全員了承)

<ウ. 各委員意見>

委員 長: それでは、ウ. 各委員意見に移る。事務局より資料に基づいて説明をお願いしたい。

(事務局 資料3に基づいて説明)

委員 長: 委員の皆さんには直前での依頼となり誠に恐縮だが、先ほどお話しいただいた神馬副委員長と前回お話しした私以外の委員に、「求められる中間支援」について発表いただきたい。あくまで現時点で委員ご自身が思われていることについて発表いただくことから、今後諮問事項の審議を重ねる中で、本日発表いただいた内容を変えていただくことも可能なので、そのつもりで発表いただければと思う。お一人3分程度でお話しいただき、すべての方の発表が終了した後、質疑、意見交換の時間を取りたい。それでは、発表をお願いする。

委員: まだ勉強し始めてからの期間が浅いので、一般的な感想に近いがお話しさせていただく。以前、サポートセンター、国際交流ラウンジ、女性プラザを利用した時には、それぞれがこれほど密接した組織であることは全く知らなかった。それどころか、自分の団体がそこで打ち合わせをするから行く、という感覚でしかなかった。私の回りを見ても、これらの機関を正しく理解していない人が実際多くいた。小中学校のボランティアコーディネーターは知っていても、市として大きな中間支援が行われていることはなかなか知られていないのが現状であると思う。誰かがやっている、興味のある人のための機関というイメージから、機会があれば自分にも関わりのある、身近な機関となることで、今まで関心のなかった人も興味を持ち、活動につながっていけば、やがて沢山の人を巻き込んだ市民参加型の事業になっていくのではないかと思う。そのためには、中間支援組織を含む、これらの組織がわかりやすく開かれたものだと知っていただくことが必要である。どんな活動をしている組織で、どんな機能があるのかは、既にサポートセンターのパンフレットやサポセン通信で発信はされているが、それ以外にも、子どもたちの義務教育の場で学んでいく機会を作るなど、小中学生のうちから巻き込んで理解が広まれば、初めは支援される側として関わった人たちが、やがて広い意味で支援する側の人になっていくと思う。同時に、それを勉強したことによって、小中学生の柔らかい頭でのアイデアを募ったり、話を聞いてみたりも出来る。

今後、サポートセンターの場所が駅前になり、さらに市民の皆さんの身近なものとなる。現在のサポートセンターのスタッフから「トイレの利用だけでも良いんですよ」と教えていただいたことがある。知らなかった人に一歩近付いてもらうことで、これからの小田原に根付いた組織となるきっかけになると思っている。

委員: 私はサポートセンターを利用した時のことについて、自身の体験をもとに、主旨とは違うかもしれないがお話しをさせていただく。私は何度かサポートセンターを利用したことがある。初めての利用は開設当時であったと思う。小学校の図書ボランティアとして、学校図書ボランティア連絡会による勉強会に参加した時であった。以後何年か、図書ボランティアの組織のスタッフとなり、会議はサポートセンターのミーティングルームで開催、勉強会もワーキングコーナーを利用し、各校の図書ボランティアが集まり盛大に行われていた。しかし、駐車場や会場の広さの問題で

別の場所へ変更された。当時からそれらの課題が見えていた。そして、私が母として強く感じたことは、子どもの利用が難しいということである。子どもとはいえ市民である。このような施設を利用するときに、親は子どもを連れてきて構わないと思う。しかし子どもたちは親が話し合いをしていれば、飽きてきて奇声を発したり、走り回ったりと迷惑行為をしてしまう。親が気を付けなければならないのは当然だが、それが難しい状況も多々ある。特に私は「子ども劇場」の一員として利用した時に感じた。そもそも子ども連れの団体となると、職員の方は良い顔をしなかった。仕方なくほかの施設を利用したこともあった。子どもたちを受け入れられない中間支援はどこか中途半端な気がしたが、部屋の狭さを考えると子どもの声が響くので仕方ないのかもしれない。子どもがのびのび出来る環境としても新しい施設に期待する。

現在、私は「たけくらべの会」でサポートセンターに登録している。主に親の勉強会として講師の話の聞いたり、個々の悩みを話し合ったりと幅広く活動をさせていただき、使用料が無料ということもあるので、メンバーにも喜ばれている。しかし、子どもを連れて行くことがはばかれるので、子どもを預けられないメンバーは参加出来ないこともあり残念である。現在のサポートセンターは地域に根付いてきたのか、いつも予約でいっぱい、希望の日に予約できないこともしばしばである。まるで競争のように先へ先へと予約する傾向にあり、これも利用する側の悩みの一つである。ここで私が中間支援組織に求めることの全容が自分なりに見えてきた。まず駐車場があること、部屋の数や広さが十分であること、設備の充実、子どもが入りやすい部屋の造りなど多数ある。そして障がいのある方が自由に出入り出来るようなエレベーターの充実、誰もが利用出来る場所になると良い。具体的な施設の充実として、図書室のような大人も子どもも利用出来る部屋があるとありがたい。学生、主婦、シルバー世代のボランティアを置くことも利用者にとっては有意義ではないか。例えば、子どもの預かり、小学生であれば宿題を見てあげることも出来る。保育士や教師志望の学生も市内外に多くいるので、大学に広告を出すなどして、広く募集するのも良いと思う。部屋があれば学童保育などに利用出来ることも考えられる。また、ピアノが一台あればコーラスの練習やちょっとしたコンサートにも利用出来る。音楽は人と人に輪をもたらす有効な手段となるのは間違いない。このような幅広い交流により、中間支援施設は小田原市の市民活動の新たな拠点となるのではないかと。

委員：私は50歳で仕事を辞めてから15年ほど経つが、その間に色々なボランティア活動、市民活動に参加してきた。そこで感じたことから、中間支援施設には何が求められるかを考えて、範囲が狭くソフト面の一部として聞いていただきたい。私が関わった市民活動については、短期間で終わったものや、今なお続けている活動もあるが、それらを実施する中で次の三点が大事なことだと思った。一番目は「壁を外す大切さ」、二番目として「欠かせない情報の収集、提供、利用」、三番目が「コーディネート機能の重要性」である。

まず1の「壁」とは、行政内の所管課と他の関係課の壁が一つ。私はこれについ

て、縦割りで情報もうまく伝わらないなど、なかなか活動がうまく回らなかったことがある。もう一つは市民団体同士の壁。団体同士を組み合わせればもっと広く活動可能になり、交流出来るようになることがある。例えば、西湘カウンセリングの会では、キャンパスおだわらに入って毎年5、6回の連続講座を行っている。「自分を知って付き合い上手に」や「私らしさの再発見」などのタイトルで年齢不問の講座だが、受講者は60歳以上の方々。子育て中の母親など毎回1、2名はいらっしゃるものの、結局参加できなくなるケースがほとんどで、この時に、子ども預かりボランティアなどの団体と協力し合えたらと感じた。また、南足柄での観光ボランティアの会では、学校関係、福祉会あるいは自治会関係などからも依頼があり活動しているが、やはり縦割りの障害にぶつかることが良くある。そのような経験から、2の「情報収集・提供・利用」は欠かせないと思う。さらに、その情報の活用の仕方として、3のコーディネート機能の重要性が出てくる。文書、インターネットなどの媒介物はもちろんだが、事業活動を行うときに何が必要か、どういふサポートが入ったらうまく運ぶのかなど、市民や団体の相談に乗り、他分野の団体を紹介したり調整してくれるコーディネーター役は必要と考える。重要な役割で大変なことと思われるが、人同士の交流を高め、広めていくにはこの機能はポイントになるのではないかと考えている。

委員：私は主に身体障がいのある方から相談を受ける仕事をしているので、そういった方々の活動を見る機会がある。その中で色々なことをやっているのに同じ障がいのある方だけかたまり、終始しているのがもったいなく、それを違う障がいのある方と共有出来る場があり、なおかつそこで地域の一般の方も交流出来れば良いということから、市民活動団体の「地域ささえ愛あみん」として、地域の居場所を作り、そこに色々な方が集まる交流の場を目指し今まで活動してきた。他の地域でそういった活動がどのように展開されているのか勉強したく、研修や見学をさせていただく機会があった。その時に知ったのが、「市民セクターよこはま」や「エセナおおた」という中間支援組織である。これらはとてもとつきやすい。例えば「エセナおおた」だと、「行列の出来る研修のつくり方」という目から鱗の研修があったが、こういった内容を企画してくれる素晴らしい組織があるのだと知った。これまで、そういった研修は行政が企画するものという先入観があったが、より身近であり具体的であり、パワフルなものを感じた。縦割りでなく、横串が通っている印象を持った。それをこの小田原で出来たら素晴らしいと期待を持っているが、具体的には情報の一元化と公開である。インターネットがこれだけ普及しているので、ボタンを押せばわかるというのが良い。

それから、連携とコーディネートであるが、活動団体同士もとても大きいと思う。今朝、市民活動サポートセンターのホームページを開いてみたが、自分たちと同じ活動をしている団体が多くあった。しかし、そういった団体と交流出来る場は思い当たらない。年に数回ある交流会に参加すれば良いが、もっと具体的に同じような活動をしている団体が集まり、情報交換が出来る場があれば活動が広がることもあると思った。

また、インターネット利用の講座をやっていたきたいと思っている。遠くの場合の活動がこんなに進んでいるのだとわかるのはすごい力である。それを自分たちの活動で活かせるようなノウハウを知りたいが、平日の昼間などに企画されるとなかなか難しい。

それから、提言という期待であるが、ほかの中間支援組織では、行政や地域に対して民間の力で提言を挙げて、それが実行に移されているという実績がある。まだまだ勉強が足りないが、そういった期待もますます膨らんでいる。

委員：中間支援組織という所で、中間ということは入口と出口があるだろうと考える。入口は市民というケースと、NPOやボランティアというケースもある。様々なホームページを見てみると、組織を見ることは可能だが、実際にこれをやりたいという時に、参加や募集の項目がないものが多かったように思う。全国組織のものも、小田原市のサポートセンターも、初めて何かやりたいという人が見た時に、「こんな人を求める」という情報や、その組織にどのようにアクションしたら良いのかわかれば入りやすい。それをまず中間支援組織が作っていただき、そういった情報により支援していただくのが良い。もう一つはどんなものが支援の対象なのか、どんなことを支援してもらえるのか、というのはNPOなどの支援をしてもらう側の入口になれば良い。

また、自治会や企業についても、中間支援組織が情報を一元化してくれることも理想的である。それから、民設民営にするとお金の話が出てくると思うが、基金を橋渡し出来るような組織になると良い。団体が活動をした中で利益が出た場合、その部分をほかの団体の活動に充てられるなどの仕組みが出来れば良い。

最後に、市民の中で「こんなボランティアがあったらいいな」など、自分では出来ないが、組織に協力を求められるような、活動をしている方だけでなくもっと様々な方が、協力出来ることは協力し、協力を求めたければそれを発信出来るようなものがあればそれが「中間」になると思う。

委員：私は市民活動と自治会をつなぐ事業等について着目し、いわゆる中間支援が求められる機能という側面から述べたい。各市民活動団体が地域活動において連携・協力出来るような場作りが必要と考える。地域住民の多様なニーズに対し、自治会の年間を通した事業等だけで回していく時代ではもうなく、そこに何か風穴を開けていかななくてはという危機感を持っている。例えば解決策として、2、3年前から地域コミュニティの運営協議会を立ち上げ、地域課題の解決に向けた様々な方策や具体的な取り組みを、26の自治会連合それぞれにある地域関係団体が一体となって展開しているところだが、今後さらなる地域住民の多様なニーズに応え、充実や発展をさせ、より豊かなものにしていくためには、各市民活動団体との連携・協力が不可欠であると思う。中間支援組織がどのような機能を持つべきかという観点から述べると、とりわけ「交流」に着目した場合、NPOと地域活動団体の一つである自治会との交流、あるいは、連携・協働の機会が、ある程度の目標を持って達成するような仕組み作りが求められるのではないかと考える。実際に、過日行われた市民活動団体ネットワーク形成事業の「自治会・市民活動団体交流会」の中で、市民活

動団体の活動紹介や、地域課題を共有したり、意見交換をするための班別での話し合いが相互に持たれたということから、新しい学びの場、共有の場が出来たと思っている。そういった意味で、市民活動と自治会の関係は、自治会の既存事業の中で、例えば敬老会で一緒に協力・連携をして展開する場面が増えつつあるが、今後、両者の交流の機会、あるいは情報提供や連携・協力の橋渡しの役割を担っていただく組織として、この中間支援が果たす機能に大いに期待したい。

委員：三施設の現状を整理することで、(仮称)市民活動交流センターの新たな形が生まれてくると思う。小田原駅東口の再開発にともなう、サポートセンターの移転をきっかけとして、今のサポートセンターの機能をどのように発展させるかが課題なので、私が期待することとして二つ挙げたい。

まず一つ目は、広報活動の推進力の強化である。駅前に設置されるという素晴らしい条件を最大限に活用すること、また、一般市民から見れば、公平に活用出来る場でありたいという考えもあると思う。今まで以上に、子どもから大人までの一般市民が気軽に立ち寄り、知ることから始められるという効果が生まれる。それが市民活動の発展につながると思う。それを十分に理解して推進する力を中間支援組織には持っていただき、発信拠点としての役割をもっと担ってほしいと考える。

もう一つ期待したいことは、横のつながり、橋渡しをさらに強化出来る役割である。三つの施設の特色や良さをこれまで以上に大切にしつつ、さらに整理して、横の連携をとることで生まれる効果を意識し推進する組織であってほしいと思う。分野別に活動するだけでなく、自治会などの地域活動団体との連携、行政との連携も視野に入れて中間支援組織としての役割を果たしていただきたい。今までサポートセンターがその中心となっていたが、継続して担っていただきつつ、全体を把握して信頼を得たコーディネーター力のある存在を期待したい。

委員：市民活動はそれぞれの団体が得意としている、秀でていることを活かして、誰かの役に立つ活動だということに尽きると思う。先ほどサポートセンターのホームページの紹介もあったが、社会的課題の解決に向けていくもので、その結果社会が良くなり市民が幸せになる、というのが市民活動の最終目的だろうと思う。そのために中間支援を担う者は、その支援、仲介や政策提言を行う。その行い方として、何のために、誰のために行うのかということを常に意識していく必要があることから、具体的に三点書き出させていただいた。

一つ目の「地域社会における市民活動を主役に引き立てること」、言い換えれば中間支援というものは主役ではなく、黒子に徹するべきだろうという風に思う。そうであっても、中間支援は特別な存在として地域の中で認められる必要はなく、中間支援を行う者が、自分たちの存続や利益を優先するというのはやはり誤りの要素を持っていると思う。行政も、NPO活動こそ地域の、冒頭で話した目的を達成する組織であって、中間支援・中間支援組織を特別視、重要視する必要はないと思っている。こうした市民活動が主役になっていくことで、新しい交流の中で、新たに、人の役に立ち導いていく新しい価値観を見出すのがミッションではないか、ということが一つ目である。

二つ目は逆になるが、中間支援を行う者が一定の人材、お金を持ちながら自ら課題解決に向かって活動していくというミッションを持つべきだろうと思う。いわば主体性の話ではあるが、それが三つ目に書いてある「信頼」につながっていくのではないかと思う。

そこで三つ目だが、中間支援組織は、行われている市民活動を自ら把握し、活動をしている方々からの信頼を得て、その代表的な存在となることが大切ではないかと思う。自分たち中間支援が市民活動に関心を持ち、あらゆることを知り得て、その知り得た情報の中から、市民活動団体の方々にとって、なくてはならない存在であるという理解や信頼を得ていくことが大事だと思う。文中に「代表的」という言葉を入れたのは、先ほど他の委員からも話があり、前回の委員長の話の中にもあった、「提言を行う」という役割が必要なのではないかということからである。一般的にアドボカシーといわれているが、市民活動を行っている方々の最大公約数の声を集約し、それを地域に、あるいは行政に、政策・施策としてしっかり固め、形成して伝えるという役割も必要ではないかということである。以上三点に取りまとめさせていただいた。

委員長：ここでいったん休憩とする。

(休憩)

委員長：それでは再開する。ただいま8名の委員からご提言をいただいたが、質問や意見はあるか。

委員：先ほど各委員もおっしゃっていたが、同じようなテーマやジャンルで活動している団体間の交流や情報交換については、ここ数年サポートセンターで登録団体のジャンル別の意見交換会が開かれていた。自分も国際交流団体や環境団体の交流会に出たが、同じテーマで活動している他の団体の話が聞けてとても良かったのでぜひ続けてほしい。

事務局：サポートセンターの事業として団体の交流を進めていくというものがある。ジャンル別に各団体に呼びかけはしているが、出席者が少ないということもあって、最近の傾向はジャンルを絞らず、講座を開催して皆さんに集まっただき、そこでジャンルを問わずに交流していただくなど、試行錯誤している状態である。委員の皆さんからこういう要望があったことをサポートセンターに伝え、例えば、障がい者福祉団体の交流会など、ご要望に応じて実現していきたいと考えている。

委員長：地道ではあるが、市民活動応援補助金のプレゼンテーションも、類似した活動をしている団体を近い時間にまとめ、出来るだけ互いに聞いてもらうようにするなどの工夫をしている。大まかなジャンル別に集まってもらうことをいつやるかは重要だと思う。それに関連して、今回委員会で考えているのは、お城通りに出来る交流センターをどのように活用していくかということだが、前に委員からも意見が出たが、小田原市に中間支援組織が一つである必要は全くない。先ほど委員から出た、中間支援的な団体が、別の団体の活動を支援する「行列が出来る研修のつくり方」という講座のように、完成した交流センターに、団体を支援する中間支援組織に来て

らい、小田原市が講座を開くことなどがあっても良い。そういったことがやりやすい仕組みも考えていかななくてはならない。

委員：委員がおっしゃった、子どもへの視点ということは大事だと思った。

委員：子どもについては全く頭になかったので、委員が言われたことには驚いた。

委員長：子どもたちのためを考えると、三つの施設には子どもが座りやすい椅子はあるか。

委員：ないと思う。障がいがある方も少々使いづらい。

委員長：委員からいくつかハード面の指摘をいただき、また部屋の数、広さ、駐車場、あるいはユニバーサルデザインという言葉も出ていたが、今の時点でトイレの位置、入口の位置など、フロアの見取り図は全部決まっているのか。

事務局：製図は始めており、大体の部分は決まっている。

委員長：この委員会の答申で反映していただく余地はあるか。

事務局：実際のスケジュールとして、9月には実施設計に入っていくので、大きな造りというものはある程度決まっている。この場では施設のレイアウト云々ということではなく、本来求められる中間支援組織の機能といった部分を中心に議論していただければと考えている。

委員長：議論をしている中で、サポートセンターのミーティングルーム1、2の利用度が非常に高いので、今は二部屋しかないが、そういうスペースをもっと増やすべきだと答申に入れた場合、それは反映出来るのか。

事務局：ミーティングルーム1、2は機能的には個室の空間である。想定では、サポートセンターの入っている市民会館の貸館機能が交流センターに移転され、個室機能は無料のミーティングルームではなく有料の部屋になる。その辺りが、かみ合うかがポイントだと思う。

委員：事務局からも話があったとおり、建物自体は上部が駐車場、全体についてはこれから詳細設計に入っていくものの、大枠は決まっているので建物の大きさが倍になるということはない。そうしたことが決まっていて、この場で議論していただくのは中間支援機能で担う役割が何かということだが、担うべきものとして答申すると、こういうものが必要だという意見が付随して出てくるのは当然だということである。

委員長：三施設の中にはエレベーターがなく大変驚いた施設があったが、交流センターはエレベーターもない、トイレがバリアフリーでもないといったことはないと考えて良いか。新しい施設は1階なので、入口から車椅子の方がそのまま入れる構造であろうし、駐車場機能も、有料か無料か、どういうシステムになるかは分からないが、存在しないということはないと思う。限られたスペースの中でどういう機能を持たせるかという議論の中で、当然こういうものが必要だと言う意見が出てくると思うが、どの程度反映出来るかということが知りたい。随時委員会に平面図や機能など情報を提供していただけるか。

事務局：可能である。

委員長：それでは、そういう前提で進めたい。

先ほど委員から、7月30日に市民活動団体と自治会をつなぐための「市民活動団体ネットワーク形成事業」について話があったが、これは今後どのような展開になりそうか。

事務局：「市民活動団体ネットワーク形成事業」とは市の事業であるが、目的は自治会など、なかなか担い手がない「地域活動」と、気持ちはあるが実現する場がない「市民活動」を結び付けて、両者が組み合うことで新しいまちづくりが出来ないかということである。第3期及び第4期市民活動推進委員会から必要性を提言され施策化したもので、「市民活動を支える会」に委託し、市も協力しながら進めている。これまでは市民活動団体を紹介するガイドブックを作って自治会に配り、市民活動団体は地域のためにどんなことが出来るかPRをした。その結果、敬老会などの場で娯楽的な催しを行うなど、年に10回ほどの連携を生み出すことが出来た。もっと幅広い連携の仕組みが出来ないかということで、先日皆さんに呼びかけた所、自治会長が約90名、市民活動団体が約70名、合計約160名の方に集まっていただき、意見交換をしていただいた。こういった交流の場を持つのは継続する必要がある、地区を限定する、もしくはテーマを設定するなど、具体的な提案をいただいたので、それらを活かして継続して実施していきたいと考えている。

委員長：そういったことは積み重ねが重要だと思う。例えば、公園を舞台にして子育て支援や子どもの遊び場・プレイパークを行っているNPOの方がいて、地元の自治会にも関わってもらおう、というものがある。ある程度分野は決まっているが、そこから分野を広げていきローテーションしていくことによりだんだん豊かになっていくこともあるので、ネットワーク形成事業の継続はぜひお願いする。また、そういったコーディネート機能も、これから出来る交流センターに持たせていきたいと思う。

委員：私は南足柄市に住んでいるが、小田原で市民活動をしている方に頼んで自治会の夏祭りに参加してもらった経験がある。夏祭りをいかに面白く、子どもたちにも楽しんでもらえるかということで、子どもも入っているフラダンスのグループに来てもらった。自治会の皆さんを始め、小田原市の方、フラダンスグループの子どもの保護者も来て、盛大な夏祭りになった。そういうこともあるので、小田原市の自治会・市民活動団体に限らず、近隣の市町村も情報の中に入れてらどうか、ということを考えている。

委員長：小田原市近辺の自治体の枠組みというものはあるか。

事務局：県西地区では二市八町（小田原市、南足柄市、中井町、大井町、松田町、山北町、開成町、箱根町、真鶴町、湯河原町）、一市三町（小田原市・箱根町・真鶴町・湯河原町）という枠組みはある。ただこの枠組みの中で、具体的に動いている例には至っていない。実際にこの場で議論していただいているように、市内でもまだ十分に熟成できていない中で、他地区まで広げてうまく回していけるのか、という部分もあるので、小田原市としては、まず市内で醸成した上で周囲の自治体に声をかけるといって良いのではないかと思います。

委員長：情報発信という形なら良いと思う。

<エ. 視察報告>

委員 長：事務局で6月に関西方面の中間支援組織を視察したということで、参考として、資料4-1、4-2に基づいて報告をお願いしたい。

(事務局 資料4-1、4-2に基づいて報告)

委員 長：何か質問はあるか。

委員：この二つの中間支援組織を選んだ理由は何か。

事務局：各市町村には大体、小田原のサポートセンターのような規模の中間支援組織はあるが、東京と大阪については全国エリアを網羅しているような中間支援組織がある。その中でも大阪・神戸は阪神淡路大震災の経験を踏まえて、ボランティア活動が盛んになり、そこで中間支援機能もかなり進んだと聞いていた。そういった情報の中で、この二施設は特色があり、視察をするに足りる所だと興味を持った次第である。他にも視察したい施設はあるが、日程等の関係でこちらを選ばせていただいた。

■ 議題2 市民提案型協働事業について

委員 長：それでは議題2 市民提案型協働事業について、資料5に基づいて事務局から説明をお願いします。

(事務局 資料5に基づいて説明)

委員 長：質問がないようなので、この実施要領に基づいて進めるということで、特に部会の委員の方にはよろしくをお願いしたい。

■ その他

委員 長：その他について事務局からお願いします。

(事務局 事務連絡)

事務局：次回、第4回市民活動推進委員会は10月18日(金)午後2時45分から市役所で実施、部会の日程は10月3日(木)か10月7日(月)で調整して別途お知らせする。

委員 長：これをもって第6期、第3回の市民活動推進委員会を終了とする。